

# ニュースパーク(日本新聞博物館)全面リニューアルの狙いと概要

日本新聞博物館 赤木 孝次

## 1. 常設展示を全面刷新

ニュースパーク(日本新聞博物館、横浜市中区日本大通11)は2016年7月20日、約1年間の一時休館を経てリニューアルオープンした。2000年10月の開館以来初となる大規模リニューアルは、常設展示をすべて刷新する全面リニューアルとなった。

今回のリニューアルは、施設や展示機器の老朽化などが契機とはなったものの、より大きな理由は、2000年以降の情報環境の変化への対応である。

現代に生きる人々、とりわけ子どもたちは、玉石混交の大量の情報に囲まれて暮らしている。小・中学校の情報教育においては、インターネット時代の情報との向き合い方を学び、情報を見極める力を身に着けることが重要となっている。当館の主たる来館層は小・中学校の団体利用であり、学校教育との連携が重要なテーマであることから、こうした情報教育のニーズに対応して展示を見直すこととした。

そして、大量の情報が行き交う現代社会において、新聞は確かな情報を届けるために日々、努力を重ねている。新聞の大切さを訴えていくことは当館の変わらぬ役割であり、現代を主たるテーマにした展示リニューアルの中で新聞の役割を捉え直し、伝えていく必要がある。これらの観点から新たな常設展示では、現代の情報社会のあり方とその中で新聞・ジャーナリズムの役割が展示の焦点とされた。

併せて、学校教育との連携を重視する観点から小・中学生にとって分かりやすく、楽しい展示を目指し、体験型展示を多く取り入れた。白を基調に、明るく開放的な雰囲気作りも心掛けている。分かりやすさの重視には、未来の新聞読者となる若い世代に、新聞に親しみを持ってもらい、新聞の世界に触れてもらう狙いもある。

## 2. 情報社会とジャーナリズムの展示

個々の展示内容について触れると、まず、現代の情報社会を可視化し、人々と情報の関わり方を考える展示ゾーンとして、今回新設した「情報の海」がある。



図1 情報タイムトンネル

このうち「情報タイムトンネル」では、古代から現代までの情報化の歴史、20世紀以降に情報が爆発的に増えていく様子を映像と音声で体感してもらおう(図1)。そして、トンネルを抜けた後に展開するコーナーで、情報の見極めの大切さを学んでいただく。デマやチェーンメールの拡散など情報社会の問題点を具体的に説明しつつ、瞬時に情報が流通する現代社会において、情報を受け取ったらいったん立ち止まり、信頼性を確認することの重要性などを挙げている。

続く「真実を届ける」のゾーンは、新聞・ジャーナリズムが果たす役割を展示している。

日本新聞協会は毎年、優れた報道を顕彰する新聞協会賞の授賞を行っている。「報道の力」のコーナーは、新聞協会賞を受賞した報道の中から6点を選び、受賞者のインタビューなどで、記事に込めた記者の思い、取材の苦勞・葛藤を伝える(図2)。2011年度以降の受賞作品から、子どもに分かりやすいテーマかどうかも念頭に、展示作品を選定している。このほか、新聞記者に親しみを持ってもらうため、タッチパネル式のモニターで記者の素顔を紹介する展示などがある。



図2 報道の力

「新聞が届くまで」は取材、編集から印刷、配達までの過程を紹介するコーナーである。小学5年生の「情報産業」の単元学習に役立てていただく狙いもある。旧常設展示室「現代ゾーン」にも同趣旨の展示はあったが、もちろん全面的に作り直している。

このコーナーは、子どもたちに楽しみながら新聞社の仕事を理解してもらうため、遊び感覚の体験型展示を多く取り入れた。たとえば、神奈川新聞社の協力のもと、紙面をパズルに分解し、来館者がゲーム感覚で組み上げる展示を置き、重要なニュースを価値付けして見せる紙面編集の仕事を体験してもらう。輪転機のスピードを実感してもらうため、来館者の手回しと輪転機の回転速度を比較するゲームもある。自転車をこぎながら画面の左右に登場するポイントに新聞を配達する「新聞配達ゲーム」は、新装した上で残している。

### 3. 「横浜タイムトラベル」の狙い

「新聞が届くまで」展示が大きな弧を描いて取り囲む円形スペースには、大型の体験型展示として、タブレット型端末と拡張現実（AR）技術を活用した取材体験ゲーム「横浜タイムトラベル」を展開している（図3・4）。

展示室に横浜港周辺のジオラマを設置。来館者は過去にタイムスリップする設定で、ペリーの来航と日米和親条約の締結、山下公園や日本大通りの誕生という横浜の歴史に、取材を疑似体験しながら迫っていく。取材の結果は新聞になり、裏面の横浜観光マップとともに、おみやげとして持ち帰ってもらう。

横浜タイムトラベルは、(1) 楽しみながら学ぶ、(2) 新聞記者の仕事への理解を深める、(3)



図3・4 取材体験ゲーム「横浜タイムトラベル」

館として地域社会に貢献する——など、今回のリニューアルのポイントが集約された展示物となっている。

タイムスリップを表現する導入部の仕掛け、親しみやすいキャラクターイメージなど、全体にエンターテインメントの要素を強めた一方、人に話を聞いてテーマに迫るという取材の意味合いはしっかり理解してもらえるようにした。取材結果のできる新聞は、どこまで深い取材をしたかによって、紙面の出来上がりが変わる仕掛けになっている。充実した取材であれば記事の量が増え、取材が不調であれば記事が少なくなる。

また、「横浜の歴史に迫る」という取材テーマの設定、精巧なジオラマの製作、観光マップとの連動には、地域とのつながりを重視する館の姿勢を込めた。当館は今後、地域に根差した博物館として、特に関内・日本大通り地区の活性化に貢献していきたいと考えている。

常設展示室の最後に位置する「新聞ひろば」は新聞の魅力を感じてもらえるゾーンである。戦後の歴史的イベントや出来事を報じた紙面を展示するほか、時宜のテーマのミニ展示を展開する。子どもたちに楽しんでもらうため、新聞に囲まれた小部屋も設置した（図5）。



図5 新聞で遊ぼう

横浜情報文化センター1階にシンボルモニュメントとして展示している新聞オフセット輪転機には、プロジェクションマッピングの仕掛けを加えた。新聞が刷り上がる様子のイメージ映像を投影することで、この機械が新聞を印刷するモノであることを示すとともに、演出の効果を狙った。2階エントランスには報道写真で来館者を迎えるウェルカムゾーンを作り、ホワイエ奥の壁面には新聞協会会員各紙を一堂に集め、展示している。

また、新たに「新聞閲覧室」を設置し、会員各紙を1週間分配架。記事データベースと併せて来館者の閲覧に供している。以前の「新聞ライブラリー」はスペースの関係で維持できなかったが、この閲覧室で、全国のさまざまな新聞に触れてもらいたいと考えている。Wi-Fi環境を整備し、適宜イベントやワークショップを開催する「多目的ルーム」は、以前からニーズが高かった学校団体の昼食場所としても利用いただいている。団体見学にとっての利便性向上を図り、展示内容と併せて学校来館の拡大につなげていきたい。

#### 4. 資料の活用と企画展

所蔵資料の活用、新聞文化の継承・発展は今後も、館の活動の大きな柱である。たとえば常設展示の導入部には、所蔵資料約90点から成るコレクションギャラリーを置いた。明治期に普及し、政論新聞から報道新聞への変化を促した「マリノ二型輪転機」を象徴的な展示物として中央に配し、その周囲に編集、製作、販売など、多岐にわたる博物館の資料を展示している（図6）。日本初の日刊新聞とされる横浜毎日新聞の創刊号（複製）や日清・日露戦争当時の号外、スピードグラフィック・カメラをはじめ歴史的瞬間を捉え

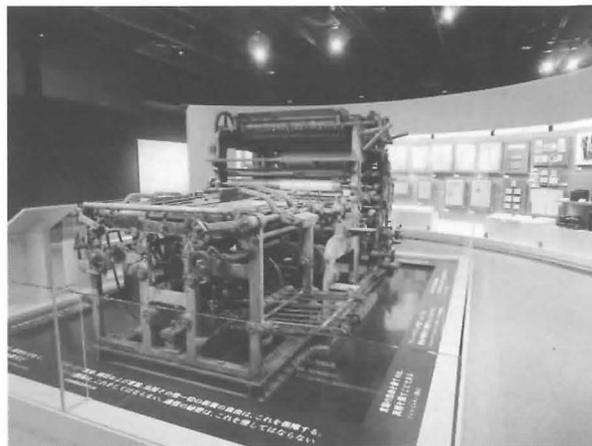


図6 コレクションギャラリー

てきた報道カメラなどもある。

また、江戸時代から現代まで、新聞の歴史をコンパクトにまとめた全30枚のパネル「新聞のあゆみ」を製作し、館内で適宜展示するほか、新聞各社への貸し出しを始めた。当館の運営母体である日本新聞協会には、全国の地方紙が加盟している。歴史展示パネルの貸し出しを軸に、所蔵資料を新聞各社に活用いただく「移動博物館」の事業を行い、特に地方紙に新聞博物館の有益性を実感していただければと考えている。

リニューアルを機に資料情報のアーカイブも構築した。国立民族学博物館などに納入実績があるATR社の閲覧端末「イメージファインダー」を館内に設置したほか、博物館のウェブサイトでも公開している。当初は約250点でスタートし、順次点数を増やしていく。

リニューアル以降、企画展として「新聞が伝えたスポーツと社会——オリンピック・パラリンピック報道展」（2016年7月20日～9月25日）、共同通信社との共催による「こんな時代があった報道写真『昭和8年』展」（10月1日～12月25日）、東京写真記者協会との共催による「2016年報道写真展」（2017年1月7日～3月26日）を開催している。特に昭和8年展は、当時の社会状況を知ることができたなどとして、年配の方からも好評を得た。今後も、現代の問題を楽しく学ぶ常設展示と、歴史をはじめ専門的なテーマを掘り下げる企画展示を組み合わせ、幅広い世代の来館を促していきたい。

#### 5. プログラム開発の取り組み

リニューアルを機に、今後力を入れたいと考え

ているのが「人を育てる博物館プログラム」の開発である。

当館は、子どもたちの創造力をはぐくむ場として、新聞各社の人材開発や地域の人々のまちづくり、生涯学習などに資する施設として、幅広い世代、分野の人々の多様な学びに対応していきたいと考えている。

中でも重視しているのは、学校教育との連携強化である。博物館の展示や施設を活用した教育プログラムの開発により、新聞や社会について理解を深めてもらうとともに、子どもたちが読解力や表現力、コミュニケーション能力を身に着ける気付きの場となるよう努めていきたい。

その一環として、これまで学校団体受け入れの中核施設となってきた新聞製作工房を「イベントルーム」と改称し、活動内容を充実させた。団体向けの体験プログラムとしては現在、見出しや短い記事を書き元新聞記者らが講評する「パソコンで新聞づくり」、新聞の読み方や新聞の役割などを解説する「新聞レクチャー」、ワークシートを手に館内を探索する「取材クルーズ」(図7)の三つを用意している。



図7 体験プログラム「取材クルーズ」

当館の体験プログラムは「新聞を読む」「新聞を作る」「取材を行う(人に話を聞く)」など、新聞に関わる内容が中心となるが、これらの活動は、子どもたちの読解力や表現力を養う上で大きな意味があると考えている。学習指導要領が掲げる新たな学力観(社会的能力の重視)にも対応しながら、当館では新聞の教育効果を生かしたプログラム開発に、積極的に取り組んでいく所存である。

#### 【参考文献】

- 新聞協会博物館事業部「ニュースパークを全面リニューアル——情報社会の姿とジャーナリズムの役割を展示」『新聞研究』2016年8月号
- 日本新聞協会『取材と報道 改訂4版』2009年
- 日本展示学会編『展示論—博物館の展示をつくる—』雄山閣、2010年(5章「博物館情報・メディア論」、6章「博物館教育論」など)
- 春原昭彦『日本新聞通史 四訂版』新泉社、2003年
- 松田美佐『うわさとは何か——ネットで変容する「最も古いメディア」』中公新書、2014年
- George E. Hein, *Learning in the Museum*, 1998 ジョージ・E・ハイン(鷹野光行監訳)
- 『博物館で学ぶ』同成社、2001年